

# 基督教保育連盟主催

## 東南アジア

### キリスト教

### 保育者協議会



一九六二年（昭和三十七年）にアイルランドのベルファスト市で開かれたキリスト教教育世界協議会の折に、東南アジア諸国のキリスト教保育関係者が非公式に集まったのがそもそもこの協議会の発端であった。一番身近かにいる東南アジア諸国が隣り同士もつとお互いを理解することが必要であるし、手を取り合って助け合わなくてはならないという自覚のもとにこの問題は、結局キリスト教保育施設の連合体がある日本に持ち込まれたのであった。即ちこの連合体とは私共の基督教保育連盟であった。当連盟は一九三一年（昭和六年）の誕生で三十数年にわたる歴史とそれなりの実力を有していたが、しかし東南アジア諸国の代表者を迎えての国際会議となるとそれは全く初めての経験であるし、当時の当連盟の内外の状況からおしてそれはかなり大きな問題であった。当連盟総会で、また全国理事會及び評議員會で何べんか議され、更に研究委員まであげられて、協議の上に協議を重ねて、私共もかつての日、外国の宣教師の愛と献身によってこの日本にキリスト教保育の種がまかれ、今日の成長をみるに至ったことを思い、こんどは、私共のできる限りの力で、東南アジア後進諸国の幼児教育に協力することこそ、私共の大事な仕事であることを知ったのである。

最初にこの問題を提示された時より四年間の物心両面の準備期間を経て、一九六六年（昭和四十一年）に、ちょうど日本にキリスト教幼稚園がはじまって八十年（明治十九年金沢市現北陸学院付属幼稚園の開園をもって初年とする）の記念すべき時を迎えるのでこの記念事業として東南アジアキリスト教保育者協議会を開催することが決定したのである。

十一月七日（月）主題「幼児教育のニューフロンティア」のもと当連盟加盟教師養成機関の一つである東洋英和女学院短期大学講堂は、この日を待ちに待っていた東南アジア十一ヶ国の代表者の華やかな衣裳と日本の代表者でうずまった。西バキスタン一名、東バキスタン一名、インドネシア二名、マレーシア三名、シンガポール三名、タイ三名、フィリピン三名、香港一名、中華民国（台湾）三名、韓国八名、沖繩二名そして地元日本は正代員二名とオブザーバ

一二〇名余が出席したのである。この他インド・ビルマ・ニュージールランド・オーストラリア・セイロンからも代表者がくる予定であったがビザや国内情勢などの関係で出席できなかったことはとても残念であった。ほとんどの国が戦後独立した新しい国であり、毎日の新聞紙上に大抵どこかの国の名がのっているほどまだまだ激しい国政動乱期にあり、あらゆる面に大きな問題をかかえている国々からの出席者であった。これら出席者の大きな特徴の一つは南方の国ほど出席者の年齢が若いことである。大部分が三十代であった。彼女たちは

それぞれ自国においてはりっぱに第一級の指導者なのである。五十代の人たちになると大部分が文盲であるとのことで、戦後独立と同時に新しい教育を受けたこの若い世代が勢い指導者となり、幼稚園々長はざらでキリスト教々育団体の指導主事であり、幼稚園教師養成短大の学長もいた。韓国は一名だけ三十代であつた。五十代であつたが、彼女たちはかつて日本語の教科書で日本の教育を受けた人たちばかりであり、きれいな日本語を話し、日本語を読ん

だり書いたりしているのを見て、何ともいえない深い感慨が心をよぎった。しかしどの人をもみても、彼女たちは自国に誇りをもち、指導者としての自信に満ちて、頭を高くあげ、希望と、理想に若々しい情熱をたぎらせているのが、印象的であつた。ふと百年前、ちよんまげに羽織袴に、威儀を正して外国へ堂々と乗り込んでいった明治初年の日本の若々しい指導者たちを思い浮べた。前進あるのみという毅然とした姿は、何か共通のものがあるように思えたのである。

世界キリスト教協議会教育部派遣の講師アリスゴダード氏の講演はキリスト教々育の真髓が語られ、韓国代表李善熙氏は両親教育を、日本選出の講師広島女学院々長広瀬浜子氏によって日本における幼稚園の歴史と現状がそれぞれ講演された。また十二日目（十一月八日）東洋英和幼稚園と青山学院幼稚園を見学し、第三日目（十一月九日）は私立二葉保育園（徳長恕園長）目黒区立八雲保育園（国吉喜久恵園長）を見学した。更に毎日協議会が開かれ、各国の幼児教育の事情の交換や質問、討議が展開された。この協議会で私共は大きな発見をし

た。それは各国と比べて日本という国があまりにも恵まれているということである。政治は一応安定しているし、ことばは統一されている。日本の国がこれほど、平和で恵まれているということは、日本の出席者一同にとつて一大発見であり、それは更に感謝につながる、日本のキリスト教保育のためにもつと努力をしなければいけないということばが期せずして一同の口にはつたのである。"See you again, in Singapore!"これが十一月十日、閉会式での別れのことばであつた。この協議会が今後つづけて開催されるために、私共はお互いに再会を約束したのである。

この協議会の大きな収穫は、お互い同士それぞれを理解することができたことである。複雑な国内事情を背負っているこれらの国々のことを私たちはあまりに知らなすぎたようである。ことばの問題を越えて、少しでも隣国を知り得たことは、私共にとつて大きな収穫であるが、同時に今後これら諸国に対して私共日本はどう対処していくかがこれからの問題として残されたのである。（基督教保育連盟 中原由利記）